

コロナ禍の中で二度目の夏で、東京オリンピック・パラリンピックが行われたり
する中ですが、76年目の終戦記念日を迎えました。毎年そういう言葉を聞く時
に、悲惨で無謀な戦争の記憶が（もちろん私自身生の記憶をもっている訳ではあり
ませんが）だんだん薄れ、忘れられていくことの問題を感じる一方で、「戦後何十
年」と数え続けることができる幸いをも改めて認識させられます。外国と戦争をし
ていないだけでこの国が平和であるとは思っていません。神様の平和、シャローム
の実現には程遠い社会の実情であることもわかっていますが、せめて「戦後何年」
というカウンターの数字が再びゼロになることのないようにと願わずにいらませ
んし、私たちは平和を実現するために祈り続けなければならないと思います。

さて、今日の聖書箇所は、ローズンゲンの聖書日課をもとに選びました。正確に
は第一コリント 15：9～10 前半が掲げられていたので説教題もそこから取ったの
ですが、やはり礼拝では 15：1 以下を読むのがよいだらうと思い、1～11 節にさ
せて頂きました。ここは、使徒パウロが、コリントの教会の人々に、自分が伝えた
福音を再確認しているところです。

その福音とは「あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしているものであ
り、どんな言葉で告げ知らされたかをしっかり覚えていれば、それによって救われ
る」ものにほかならないとパウロは言います。「生活のよりどころとしている」と
いうのはかなり意識で、直訳すると「それによって堅く立っている」という言葉で
す。もちろんその福音は、パウロがかつてコリントの信徒たちに伝え、彼らが受け
入れたものにほかならない訳ですが、パウロは「どんな言葉でわたしが～告げ知ら
せたか、しっかり覚えていれば」と言い、「さもないと、あなたがたが信じたこと
自体が、無駄になってしまうでしょう」とも言っています。これは単なるおさらい
ではなく、彼らとその福音に堅く立ち続けているか、パウロの伝えた福音の言葉を
いつの間にか見失いかけていないか、もしそうであれば、彼らの信仰自体が無駄に
なってしまうのではないか、という不安もしくは懸念を暗示しているようです。

「どんな言葉で告げ知らせたか」というのは文字どおりパウロの語った一字一句を
暗記しているということではなく、何がまことの福音であるか、その核心部分をし
っかり覚えていてほしい、という思いなのです。

パウロは、その福音を自分自身が発見したとか創作したとか言っている訳ではあ
りません。むしろ、そうではないことをコリントの人々にあらためて強調していま
す。福音、3 節で「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えた」ことと言
い換えられていますが、それはパウロ自身も受けたものである、とはっきり言っ
ているのです。パウロはこの手紙の 3：5 で「わたしは植え、アポロは水を注いだ。

しかし、成長させてくださったのは神です」という有名な言葉を記しています。もちろんコリントの信徒たちの信仰を、ひいてはコリント教会そのものを成長させたのは神様に他ならないのですが、少なくとも福音を伝えて信仰の苗を植えた、つまり教会の土台を据えたのは自分である、という自負をパウロはもっていたと言えます。しかし、その福音とはあくまで自分自身受けたもの、つまりキリスト教会に（当時はまだ生まれて間もない、歴史の浅い集まりに違いありませんが）伝えられてきたものである、と彼は言うのです。

たしかに、誰から福音を聞いたか、ということが私たちにとって重要になる場合があります。それが福音を受け止める上で助けになることもあれば、時には妨げになることもあるのは事実かもしれません。しかし、基本的に福音は教会に委ねられ、教会を通して伝えられ、受け取られる、そして受けた者がさらに告げ知らせ、広めていくものにほかならないのです。パウロはここで、自分自身受けた福音を彼らに伝えたのだし、今もう一度確認しているのだ、ということを経典の信徒たちに理解させようとしています。

そして、3節後半から、その福音の内容が記されています。「キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。」その後にはまだ言葉が続くのですが、教会で受け継がれていた伝承はここまでだと言われています。十字架という言葉はここには出て来ませんが、キリストの（贖罪のための）死、埋葬、復活、そして復活後の顕現を、神様が私たちの救いのために行われた出来事、救いの御業として、最初の教会は「福音」という言葉で語り継いでいたのです。もちろんそれは二千年後の今も変わらずキリスト教信仰の中心をなすものです。パウロの時代からおよそ20年あるいはそれ以上後には、福音書が記され、主イエスの十字架と復活に重心を置きながらも、主イエスの教えや御業をも「福音」として伝えました。現代の私たちにとって、キリスト教の福音と主イエスの人格や言葉、生き方を切り離すことはできないと思いますし、切り離す必要もないと思います。しかし、パウロの時代においては、ここに言われている「最も大切なこと」が福音の内容だったのです。

キリストがわたしたちの罪のために死んだこと、もう少し言えば、私たちの罪の身代わりとして罪なき神の独り子である主イエス・キリストが十字架につけられ、罪人の姿で死なれたこと、これは言うまでもなく私たちの信仰の要でしょう。なぜ一人の人が死んですべての人の罪が赦されるのか、ということはたしかに不思議なことで、信仰者でない人にとっては疑問とされるのも当然かもしれません。もちろんキリスト教二千年の歴史の中で多くの神学者や説教者がそのことについて語り、説き明かしてきたのですが、せんじつめれば、神様がそのように決断なさったから、と言うほかないように思います。愛なる神様は罪人がその罪のゆえに滅びるこ

とを望まれず、しかし同時に義である神様は罪を裁くことなく見逃しにするような仕方で赦すことはおできにならない。その愛と義が貫かれるために、神様は独り子を世にお与えになり、ただ一人罪をもたない方である主イエス・キリストを罪人として十字架の死に渡され、その死によって罪の贖いを成し遂げられた、ということです。

それはしかし二千年前に神様が突然そのように思い立った訳ではなく、「聖書に書いてあるとおり」、つまり旧約聖書によってつとに預言されていたことである、とされています。パウロはここで聖書を一切引用していないので、聖書のどこに記されているのかということは明らかにされていません。多くの方は、イザヤ書 53 章のいわゆる「苦難の僕」の預言を思い浮かべます。たしかにこの預言は後に書かれた使徒言行録の 8 章で、エチオピアの宦官が読んでいた聖書として引用され、明らかに主イエスを指し示す預言として解釈されています。少なくとも最初の教会において、主イエスと重ねて考えられていたことは間違いないでしょう。しかしここでパウロの念頭にそれがあつたかどうかは確認できないので、確かに言えることは、パウロおよび初代教会において主イエスの贖罪の死が旧約聖書に預言されていた神様の救いの意思の実現と信じられていた、ということだと思えます。

ひと続きに書かれている「葬られたこと」については、聖書に書いてあるとおりとは言われていません。旧約聖書に主イエスの埋葬に結びつけられる箇所を見出すことは難しいでしょうし、パウロもそれを主張するつもりはなかったようです。ただ、主イエスが死なれたこと、そして三日目に復活されたことの間には当然墓に葬られたというプロセスがあつたと考えられたのです。後の福音書に書かれたような主イエスの埋葬に関する伝承がパウロの時代に知られていたかどうかはわかりませんが、おそらくさほど重要とは見なされなかったのかもしれない。

パウロにとって、またこの箇所の議論にとって、より重要なのはその次の「聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと」でしょう。ただし三日目の復活という部分に関して、旧約聖書のどこが根拠とされているか、これも定かではありません。多くの方は、パウロがホセア書 6:2 の「二日の後、主は我々を生かし／三日目に、立ち上がらせてくださる」という言葉を念頭に置いているのではないかと推測しています。いずれにせよ、主イエスの復活は教会の初めの時からその死と共に信仰の中核であり、福音の中心的内容とされていたに違いありません。

その主イエスの復活とはどのようなものだったのか、私たちが思い浮かべるのは福音書に記されたいわゆる「空虚な墓」の場面ではないでしょうか。しかし、先ほども言いましたが、福音書は最も早く書かれたといわれるマルコでもパウロの時代よりおよそ 20 年後、あるいはそれ以降に書かれたものです。パウロ自身は福音書を目にしたことはなかったし、福音書に記された復活の記事、またそのもととなった伝承を知らなかったのではないかと思います。けれども、復活の出来事をその場

で目撃していなくても（福音書にしても誰かがその時その場で復活を見たと言っている訳ではありませんが）主イエスの復活は最初の教会、信徒たちに知られていました。それは復活の主が残された者たちに現れたからです。そこにどのようなストーリーがあったのか、復活の主を見た人々がどのようにその出会いを伝えたのか、パウロは詳細を語っていません。しかし、パウロにとっても最初のキリスト者たちにとっても、大事なものは主が復活してその姿を地上で現されたということだったでしょう。ちなみに、キリストが死なれた、葬られた、という文は過去の出来事を表す時制で書かれていますが、復活したことは完了形の受動態で表されています。キリストの復活は過去に起こった一回限りの出来事であるだけでなく、よみがえらされた方としてその主が今も生きておられるということ、そしてその復活は神様の御業であることが示されているのです。また、キリストが復活して「現れた」という言葉には、主がご自身を示されたということと同時に、ケファをはじめとする人々が主を見たという意味も含まれています。主は彼らの前に現れただけでなく、彼らを復活の証人とされたということでしょう。

ケファとはご存じのように主イエスの直弟子の筆頭とも言えるシモン・ペトロのことです。漁師であったシモンを主イエスが兄弟のアンデレと共に弟子として招き、彼に岩を意味するケファ（ギリシャ語に訳すとペトロ）というあだ名をつけられたのですが、本名のシモンよりも主イエスが与えたあだ名、しかもそのギリシャ語訳が有名になって、私たちももっぱらペトロという名前で憶えているのではないのでしょうか。そういう訳でケファと十二弟子（というより十二使徒と言ったほうがよいでしょう）を区別するのはおかしいのですが、ここでいう「十二人」は主イエスの直弟子だったあの人々をまとめて表す用語と考えられます。既に主イエスを裏切ったイスカリオテのユダはそこから脱落しているし、使徒言行録 1 章に書かれている補欠選挙があったとしてもペトロを除けば十一人だった訳ですが、パウロが言っているのは人数のことではない、と考えておけばよいでしょう。主イエスがこの人々に復活の姿を示されたことは福音書にも記されているし、おそらくそこまではごく初期の教会でも知られていたことなのでしょう。しかしパウロは 6 節以下の言葉を特に区切りを置かずに続けます。

「次いで、五百人以上の兄弟たちに同時に現れました」以降の部分は、新約聖書の他の箇所には見られません。使徒言行録 2 章の聖霊降臨の出来事が引き合いに出されることがありますが、使徒たちが聖霊に満たされているいろいろの言葉で話しだしたというあの場面と復活の主の顕現を同一視するのは難しいように思います。しかし、パウロはその多くが今も生き残っていると言っているので、ありもしなかったことをでっち上げているという訳ではなく、当時の教会においてそう伝えられていた、またそのように証言する人々がいたのかもしれない。「次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ」という言葉についても聖書による裏付けはありま

せん。ヤコブとはおそらく主イエスの兄弟であり、初代教会の柱と目される一人となったヤコブのことだと思われます。一般的にはヤコブを使徒とは呼ばないし、また十二使徒と区別される「すべての使徒」とは誰のことかも明らかではありませんが、これもパウロの創作というよりは初代教会の一部で語られ知られていたことなのかもしれません。パウロが言わんとすることは、復活の主の顕現が多くの人に示され、そしてその最後に自分にも示された、ということにほかなりません。

パウロが復活の主に出会ったということは、おそらくキリスト者である私たちの共通認識と言ってよいと思います。では主はどのような仕方でパウロに「現れた」のでしょうか。多くの方は、使徒言行録に記されたダマスコ途上の出来事を思い浮かべるでしょう。私もそうです。実は私が通っていた教会学校ではある時期、クリスマスにページェント（聖誕劇）ではない劇をしていました。記憶に間違いがなければ、その1年目か2年目に演じたのが、パウロの回心の物語だったのです。私はアナニヤの妻という端役でしたが、友人がパウロの役を演じたのを覚えています。ですから、眩い光に打たれて倒れたパウロが復活の主イエスの言葉を聞いたあの場面は強く印象に残っています。ちなみにその場面は使徒言行録9章に描かれています。同じ使徒言行録でその後二度にわたってパウロ自身がその出来事を回想して語る記事があるので、より強く印象づけられることもあるでしょう。

しかし、パウロ自身はそのようなドラマチックな出来事を語ってはいません。ガラテヤ書では「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子をわたしに示して」とだけ記されています。ですから、どうかたちで主の復活顕現に接したのか、実のところわからないのです。けれどもパウロ自身にとって、「神が御心のままに御子をわたしに示した」ことは紛れもない事実で、それだけが重要だったのだと思います。それは彼自身にとっても周囲の人々にとっても決して当然のことではありませんでした。

パウロは「最後に、月足らずで生まれたようなわたしに現れました」と言います。早産、未熟児というようなニュアンスをもつ言葉が使われていますが、それは彼自身の自己認識というより、外部から中傷の言葉として言われた言葉だったかもしれません。もちろん現代において人を中傷する表現としては許されないと思いますが、そこには不完全な、あるいは生まれるのにふさわしくない、という非難や嘲笑が込められているのでしょう。パウロはコリントの信徒への手紙（特に第二の手紙）の中で何度か、おそらく敵対者から投げつけられた、または陰でささやかれていたと思われる中傷の言葉をわざともち出してそれに反論する文章を書いています。しかし、ここでは反論のためではなく、最後に、自分のような者にまで（主が現れてくださった）という思いを表しているのではないかと思います。

もちろんそれは、単なる謙遜ではありません。「わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちの

ない者です」とパウロは明確に述べています。使徒言行録が記しているように、教会を迫害しようとしてダマスコに向かっていた途上で眩い光に打たれ、主の声を聞いたのかどうかはわかりません（少なくともパウロ自身はそのように手紙に記してはいませんが）、彼が教会の迫害者であったことはガラテヤ書にもフィリピ書にも明確に述べられています。それは、ユダヤ教ファリサイ派の熱心な信徒であったパウロの信仰的確信と熱意によるものでした。つまり、律法によれば「木にかけられた者は呪われている」とされているので、十字架で殺されたイエスという人物をメシアと信じるキリスト教会は神に背く者の集団であり、その教会を迫害し滅ぼすことは神の御心に適うことだと信じて、パウロは迫害にいそしんでいたのです。それは同時代のユダヤ教徒の多くが大なり小なり共有していた信念だったと思います。ですからパウロが復活の主に出会い、回心してキリスト者となったばかりか福音を伝える者となった時、彼はそれまで仲間だった者たち、同胞のユダヤ人から裏切り者と見なされることになったのです。パウロ自身そのように見られることは十分想像がついたと思います。しかし、既にキリストに捉えられた彼は、かつてのユダヤ教徒としての確信や生活に戻ることはできませんでした。たとえ、使徒と呼ばれる値打ちのない者、使徒たちの中で最も小さな者に過ぎないとしても、キリストの使徒とされたことを否むことはできなかったのです。

使徒という言葉は、ギリシャ語のアポストロス、直訳すれば「遣わされた者」という意味になります。主イエスの直弟子だった十二人のことを「十二弟子」また「十二使徒」と呼ぶように、最初は使徒と言えどもっぱら彼ら十二使徒（イスカリオテのユダを入れるかどうかは微妙ですが）を指して使われたようです。先ほど触れたように、十二人のほかに「すべての使徒」がいたというような使い方は、パウロの時代において例外的だったと思います。少なくとも福音書や使徒言行録を見る限り、この呼び名は十二使徒にほぼ限定されているのです。しかしパウロは回心と召命を同時に体験した時から、自分を「キリストの使徒」と呼んでいます。たとえ過去の行為のゆえにその名に値しない者であったとしても、キリストに出会い、赦され、召しを受けて福音宣教に派遣された以上自分のアイデンティティーは「使徒」にほかならない、とパウロは信じていたのでしょう。

神の教会を迫害したという過去は、ユダヤ教徒としての確信に基づくものであったとしても、パウロにとってはできることなら消してしまいたい汚点だったのではないのでしょうか。少なくともある時点までは、同胞から裏切り者と言われるだけでなく、教会の中でも不信や恨み、反感や憎悪の目で見られることがあったらと想像できます。しかしパウロはその過去をなかったことにはせず、またそんなことをしてきたのだから何を言う資格もない、と教会の中でひっそり身を隠すのではなく、自分に与えられた恵みを堂々と証しするのです。

新共同訳聖書の翻訳ではやや唐突に、「神の恵みによって今日のわたしがあ

です」という言葉が語られます。原文のギリシャ語には「しかし」と訳せる接続詞があるので、それを入れて読んだほうがよいように思います。口語訳聖書ではこの部分が「しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである」、最新の聖書協会共同訳では「神の恵みによって、今の私があるのです」となっています。どれでも大した違いはないとも言えますが、これは聞きようによっては少々傲慢にも聞こえる言葉かもしれません。

私は高校時代太宰治が好きで、有名な長編のほか、短編集もかなり読みました。その中の、さほど有名ではないと思いますが、「きりぎりす」という短編小説のことを思い出します。詳しくは実物をお読み頂ければと思いますが、ある画家の妻が、名前が売れるにしたがって天狗になり、俗物の本性を表す夫に愛想を尽かして別れを告げている手紙のかたちで、全体が一人称で書かれています。その小説の中に、夫が何かのスピーチで「わたしが今日ありますのは・・・」と言った言葉を取り上げて、いったい何様のつもりだ（とは言っていなかったかもしれませんが）、と妻が軽蔑を込めて語っている文章があったのです。

たしかに言葉の上ではパウロが書いているのもほぼ変わらないかもしれませんが。原文は、直訳すると「神の恵みによって私は私である」というふうに書かれています。しかしパウロは、人に名を知られたとか伝道に成功したとか、つまり何かを成し遂げたという意味で「今日のわたしがあつた」と言っている訳ではないと思います。人に名を知られようと知られまいと、この世的に成功しようと失敗しようと、今あるように自分があることは神様の恵みによって生かされていることにほかならない、ということではないでしょうか。パウロにしても、人間としての欲求や感情はもちろんあつたでしょう。コリントの教会において彼の使徒としての適性や能力を否定したり彼自身を蔑んだりする者たちがいた時、それを気にも留めず笑って済ませた訳ではありません。特に第二コリントには、彼が自分（の使徒職）を弁明している言葉が何度か出てきます。けれども、そうした外からの評価やこの世的な成果、業績といったものにかかわらず、神の恵みが自分にあり、自分は今ある状況で恵みによって生かされている、ということが彼のベースになっているのです。そしてそれはすべての信仰者の土台でもあると思います。

パウロはすぐに、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働いた、と言います。彼にとって恵みを与えられて生かされていることと、恵みに応えて、あるいは恵みを用いて、宣教の働きに励むことは切り離し難いひとつのことだったのだと思います。あまりここで他人との比較をもち出さないほうがいいのに、と思わないでもありませんが、パウロには実際誰よりも宣教の働きに励んだという自負があつたでしょう。それは、ローマの信徒への手紙で言われているように、他人の築いた土台の上に建てるのではなく、キリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせる、というポリシーに基づいた働き

だったと思います。そのためにパウロは危険を冒して宣教旅行を三度もしたのでしょうし、その宣教が労苦の多いものであったことは、第二コリントのいわゆる「苦難のリスト」などに明らかです。

けれどもパウロはまたすぐに前言を打ち消すように「しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」と続けます。他の使徒たちよりずっと多く働いた、という言葉が自分を誇るものに聞こえる（その言葉自体はそう聞こえても無理ないと思いますが）ことを恐れたのかもしれませんが。パウロは、自分の宣教の働きはすなわち自分に与えられた恵みによるもの、その恵みがかたちに現れたものに過ぎないと言うのです。

そう書いた瞬間に、パウロは自分がここで何を伝えようとしていたのか思い出したようです。パウロはコリントの信徒たちが、自分が伝えた福音を、とりわけその要と言えるキリストの復活を、忘れた、または疑い否定するようになったということを知り、その福音をもう一度確認しようとしていたのです。そのことを思い出し、まことの福音にしっかり立ってもらいたい、そのためには誰が宣べ伝えたか、誰の働きが大きかったかなどどうでもよい、パウロはそう思ったのでしょう。

「とにかく、わたしにしても彼らにしても、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのでした」という言葉は、やや乱暴で性急な感じがしなくもありませんが、パウロがコリントの人々に伝えたい、再確認したいことを端的に言い表しています。そのことをしっかり覚えていてくれるなら、その福音に堅く立っていてくれるなら、自分はたとえ月足らずに生まれたような者と言われても、使徒と呼ばれる値打ちもない、使徒の中で一番小さな者であっても（使徒であることは譲れなかったでしょうが）構わない、なぜならそのような者だからこそ、神の恵みによって自分は今あると言えるのだから。それがパウロの思いだったのでないでしょうか。

最初の教会に伝えられた福音は、二千年後の今も、私たちが受け入れ、それによって堅く立ち、しっかり覚えているべき福音です。それは、神様が私たちを愛して私たちの罪をキリストによって赦し、救いに導かれるためになされた御業の知らせだからです。その福音を聞いた者として、そこに現わされた神様の救いの御心に希望を置いて生きる時、私たちもまた、神の恵みによって今の私があるのだ、と告白することができるのではないのでしょうか。人生において思うに任せないことがたしかにあり、この世の価値基準や人からの評価に揺れ動くことも多い私たちですが、絶えずその福音に立ち戻り、今与えられている恵みに目を留め、恵みを無にしない信仰の歩みを続けて行きたいと願います。